

# 『平家物語』の混種語についての史的考察

全 亨 式<sup>1)</sup>

## <要旨>

本 論文에서는 가마쿠라(鎌倉) 시대의 대표적인 군키모노가타리(軍記物語)인 『헤이케모노가타리(平家物語)』에 이용된 혼종어(混種語)의 품사별 분포를, 무로마치(室町) 시대의 구두어 자료인 『오쿠라토라아키라본 교겐슈(大蔵虎明本狂言集)』와 비교 고찰했다. 우선 혼종어의 전체상과 비율을 파악하기 위해 계량적 방법(언어수와 별개어수)을 이용했으며, 이 데이터를 통해 역사적으로 어떻게 한자어를 수용, 동화해 갔는지를, 품사의 출현 시기를 시대별로 구분하여 그 성격을 파악했다. 그 결과 무로마치 시대의 구두어 자료에 혼종어의 비율이 높아지고, 품사별로는 명사 혼종어가 압도적인 사용도를 나타내고 있는 것을 알 수 있었다. 신출의 명사 혼종어는 작품이 성립한 각각의 시대에 많이 등장한 것이 되지만, 역사적인 면으로부터 생각하면, 헤이안(平安), 가마쿠라(鎌倉), 무로마치(室町)로 혼종어 명사는 점차 증가하고 있다고 하겠다. 일반적으로 중세를 한 묶음으로 생각하는 경향이 있는데, 중세어라고 해도 전기의 가마쿠라와 후기의 무로마치는 일본어의 역사상 확실히 구분하여 생각해야 될 것이며, 결론적으로 이러한 현상은 무로마치 시대가 근대어로 발전하는 시발점이 된다고 하는 좋은 일례가 된다고 생각한다. 남은 과제로는 동시대의 다른 자료, 근세의 자료 등과의 비교를 통해 이 점을 충분히 논증해 나가야 하겠다.

キーワード：中世語、混種語、品詞の受容、室町時代、日本語化

## 1.はじめに

日本語の歴史を考える場合、日本語の変遷過程を大きく両分すれば、古代語と近代語とに分けられる。これは、近代語の要素が認めにくい時代と、多く認められる時代とに分けて、前者を古代、後者を近代との二分割にする方法に従って行われおり、その下位分類までを考えるとさらに細分化することができる。だからといって、日本語の歴史を政治史や文学史のように明確に分けることはできない。なぜならば、ある時代の言語変化が起った場合、元の現象が一時に無くなるわけではなく、新旧の現象が共存する過渡期としての時期を経るからである。<sup>1)</sup>

一般的に中世といえば、鎌倉時代と室町時代に両分することができるが、日本語史の観点から見ると両時代は日本語の諸般様相において大きく異なっている。特に、その中でも語彙・語法の面に現れる諸現象に注目すれば、前期は古代語の様相が強く、後期は近代語の様相を色濃く反映している。室町時代の日本語が近代日本語の基礎をなしているとするのは、長期間にわたる戦乱によって、武士・農民をはじめとした各階層の全国規模の交流が行われ、その結果、言葉もその影響を受けたためである。従って、従来の京都中心の日本語が人々の大規模の交流によって、全国各地の言語と融合し、古代語の様相から脱却したのである。このような変容の中で、特に重要な役割を担ったのが漢語である。

1) 高麗大, 日本語学

平安時代の文書・記録の類は資料の性格上、漢語が主に用いられている点では、前時代にくらべて実用的になったといえるが、中世語に漢語の進出が著しいといわれるように、鎌倉時代に至って識字階層が貴族や僧侶ばかりではなく武士階級にも拡大した結果、漢語が彼らの日常常用の漢語として一層多く用いられるようになった。このように、漢語は受容の初期段階では限られた知識人階層によって、書記言語（書き言葉）としての役割を担っていたが、中世は貴族中心の言語に代って民衆的な言語が台頭し、初期の外来語次元からの受容が日本語に同化され、漸次日本語化していたといえる。<sup>2)</sup>

拙稿(1999, 2000)<sup>3)</sup>において、室町時代になると、平安・鎌倉時代とは異なり、名詞混種語が大量に受容されたことを指摘したが、これが室町時代と口頭語資料とに限っての特徴なのか否か、前時代の書言葉資料との比較しながらの考察できなかった。

本論文では、次のような二つの観点から考察することを目的とする。一つは、中世後期の日常語・口頭語に用いられた漢語の実態と中世前期の文章語に用いられた漢語の実態とはどのような特徴が見られるか、二つは口頭語と文章語資料とには、それぞれの資料の性格によってある程度の偏りがあると考えられるが、実際にはどのようなずれが見られるかをも考えていきたい。従って、このような通時的な観点からの考察のため、鎌倉時代の語り系本で和漢混淆文の典型であるといわれている『平家物語上・下』<sup>4)</sup>をテキストとする。

## 2. 混種語の使用度とその性格

平家物語の混種語<sup>5)</sup>の全体像及び品詞の出現率を把握するために、異なり語数と延べ語数を計量的にとらえて示す。なお、他の軍記物語との計量的な比較のために、鎌倉時代の軍記物語の典型とされる保元物語・平治物語の二作品をも一緒に取り上げることとする。

軍記物語に用いられた混種語についての量的考察を行う。

軍記物語の混種語は、

	異なり語数	延べ語数
保元物語	225語	465語
平治物語	152語	299語
平家物語	566語	2,203語

となり、これを品詞別に示すと次の<表1>のようになる。

<表1>混種語の使用度と品詞別分布

品詞	保元		平治		平家		狂言集	
	異語数(%)	延語数(%)	異語数(%)	延語数(%)	異語数(%)	延語数(%)	異語数(%)	延語数(%)
名詞	29(12.9)	44(9.1)	27(17.8)	35(11.7)	55(9.7)	366(16.6)	419(54.9)	1,415(18.6)
動詞	164(7.9)	336(72.2)	98(64.5)	199(66.6)	426(75.3)	1,528(69.4)	192(25.2)	4,191(55.2)
形容動詞	28(12.4)	74(15.9)	25(16.4)	61(20.4)	75(13.3)	267(12.1)	141(18.5)	1,835(24.2)
形容詞	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	5(0.7)	8(0.1)
副詞	4(1.8)	11(2.4)	2(1.3)	4(1.3)	10(1.8)	42(1.9)	6(0.8)	142(1.9)
合計	225(100)	465(100)	152(100)	299(100)	566(100.1)	2,203(100)	763(100.1)	7,591(100)

品詞別の混種語を異なり語数と延べ語数の使用度順に並べ、狂言集の場合と比較してみると、軍記物語の異なり語数では保元・平治が、

動詞→名詞→形容動詞→副詞→形容詞  
の順となり、平家が、

動詞→形容動詞→名詞→副詞→形容詞  
となる。延べ語数では、保元・平治が、

動詞→形容動詞→名詞→副詞→形容詞  
の順で、平家が、

動詞→名詞→形容動詞→副詞→形容詞  
の順となる。一方狂言集では、異なり語数で、

名詞→動詞→形容動詞→副詞→形容詞  
の順となり、延べ語数で、

動詞→形容動詞→名詞→副詞→形容詞

となる。この順位から考えると、品詞別の混種語では、異なり語数において軍記物語の動詞が最多を占め、次の二位では保元・平治が名詞が占め、三位が形容動詞、平家では形容動詞が占め、三位が名詞、狂言集は逆に最多が名詞、次いで動詞となり、他は同一の分布を示している。

軍記物語と狂言集において動詞と名詞や形容動詞とに出現上の差が見られるのは、どうしてかと言うと、軍記物語は和漢混淆文の典型として、平安時代の和文体を基盤に記録性を明確にして書き記されているため、混種語化した名詞を用いることがいまだ一般化せず、漢語に「す」や「なり」「たり」を付した混種の動詞や形容動詞が容易に用いられた、その文章形成を反映した結果と考えられる。なお、保元・平治では比率上、名詞→形容動詞となっているが、実態は優勢がなかったとすべきで平家の形容動詞→名詞が当時の実態を現していたと考えられる。

延べ語数の比率では、保元・平治が形容動詞→名詞、平家では名詞→形容動詞と、異なり語数の場合と逆になっている。これは、平家が形容動詞に比べ、同一の名詞を多用しているためと考えられる。狂言集は、拙稿(1999, 2000)ですでに述べたように、当代語を反映させ、日本語化の進んだ混種の名詞を自由に用いることができたことと日本語の品詞別出現率は名詞が圧倒的である<sup>6)</sup>ため、漢語の日本語化が進めば当然混種の名詞を多く用いることになる。狂言集の名詞が一位であるのはその反映である。動詞と形容動詞とでは形容動詞の方が動詞よりは使用が限られてきたためと考えられる。

次に、このような混種語はどのような語によって占められているかを、異なり語数で最多の平家物語を一例として品詞別に分け、形態面での特徴を見ることにする。

## 2.1 名詞

日本語と漢語の熟合例を漢字二字のものと三字以上のものとに分けると、次のようになる。

### 1) 漢字二字の語<sup>7)</sup>

#### ① 重箱読み語 (11語)

だいぢから ぶんどり ざしき らんぼこ んんかた かうぞめ がくや きやうのぼり ぐわんだて ごくもり こんかき  
大力14 分捕5 座敷3 乱箱2 院方1 香染1 楽屋1 京上1 願立1 獄守1 紺掻1

#### ② 湯桶読み語 (28語)

かやう おおせい さやう いまやう しげどう あかち あまぜ おほまく さしづ こせい  
ス様91 大勢43 然様20 今様15 滋藤15 赤地13 尼前6 大幕4 指図4 小勢3  
さかろ おおやう こひやう さむらひほん てほん わかたう あした あひづ あらぎやう おほぼん かきやう こじ  
逆櫓3 大様2 小兵2 侍品2 手本2 若党2 足駄1 合図1 荒行1 大番1 書様1 小師1  
こもん さむらひやう さるがく てせい ななたう はなかう  
小門1 侍僧1 猿楽1 手勢1 七党1 花香1

### 2) 漢字三字以上の語 (16語)

てんじやうびと しらびやうし わごせ きぶくりん おほぼんじゆ こくわんじや わかだいしゆ がくうちろん こくそく  
殿上人48 白拍子10 我御前10 黄覆輪8 大番衆3 小冠者3 若大衆3 額打論2 小具足2  
おほぼんやく こげうくん こざいしやう こじじやう しるぶくりん ながぶくりん あけすい  
大番役1 小教訓1 小宰相1 小侍従1 白覆輪1 長覆輪1 井花水1

名詞の使用度の分布を狂言集とともに挙げると、次の<表2>のようになる。

<表2> 名詞混種語の使用度分布

名 詞	異なり語数 (%)		延べ語数 (%)	
	狂言集	平家	狂言集	平家
1) a	85(19.9)	11(20.0)	273(19.0)	31(8.5)
1) b	101(23.6)	28(50.9)	482(33.6)	239(65.3)
2)	242(56.5)	16(29.1)	680(47.4)	96(26.2)
合 計	428(100)	55(100)	1,435(100)	366(100)

軍記物語の混種語の異なり語数と延べ語数では、1) b湯桶読みの語、2) 漢字三字以上の語、1) a重箱読みの語の順になり、漢字二字の語が混種語の約70%以上を占めている。重箱読みの語と湯桶読みの語とでは、湯桶読みの語が2.5倍も多くなっており、ここでの結果も日本語の歴史上、湯桶読みの語が重箱読みの語より優先して一般化した<sup>8)</sup>と同じである。

一方狂言集では、漢字三字以上の語が全異なり語数と延べ語数で平家物語より約二倍近く多く現れている。これは、先に述べたように平安時代の和文体を基盤とする平安末期の動乱や事件の経緯などを歴史記録の性格のように書き記された平家物語に比べ、当代語を反映させた狂言集が多様な状況に対応できる混種語の名詞（漢字三字以上の語）を積極的に用いることができるような時代になったため、その結果が数値に現れたのである。

漢字二字の語では、平家物語と狂言集ともに湯桶読みの語が重箱読みの語を凌駕し、優勢を示しているが、前述のように、歴史的にみると、「訓+音」形式の湯桶読みの方が日本語化が進んだ熟語として多く用いられたものと考えられる。

次に、漢字三字以上の混種語を一熟語の形式のうち、第一番の漢字を字音の場合と字訓の場合とに分け、さらに下位の漢字を音訓別に分けて分類する（数字は漢字数）と、次のようになる。

狂言集では、

- (1) 第一番が字音の場合
  - ① 字音一+字訓一+字音二（3語）
  - ② 字音一+字訓二（10語）
  - ③ 字音二+字訓一（90語）
  - ④ 字音二+字訓一+字音二（1語）
  - ⑤ 字音二+字訓二（7語）
  - ⑥ 字音三+字訓一（7語）
  - ⑦ 字音四+字訓一（1語）
- (2) 第一番が字訓の場合
  - ① 字訓一+字音一+字訓一（4語）
  - ② 字訓一+字音二（92語）
  - ③ 字訓一+字音三（2語）
  - ④ 字訓二+字音一（8語）
  - ⑤ 字訓二+字音二（14語）

のように、複雑な型を見せていたが、平家物語では、

- (1) 第一番が字音の場合（傍線は訓読み）
  - ① 字音二+字訓一（1語）  
殿上人
  - ② 字音一+字訓一+字音一（1語）  
額打論
- (2) 第一番が字訓の場合（傍線は訓読み）
  - ① 字訓一+字音二（一四語）

井花水 大番衆 大番役 黄覆輪 小冠者 小教訓 小具足 小宰相 小侍従  
白拍子 白覆輪 長覆輪 若大衆 我御前

となり、平家物語の熟語の形式は狂言集より単純な型を見せて混種語進出の初期的な様相を示している。字音が語頭に来る型が狂言集では7型119語、字訓が語頭に来る型が5型120語であるのに対し、平家物語ではそれぞれ2型2語と1型14語となり、平家物語の名詞の音訓混淆の型が狂言集に比べ、ずっと単純で少ないのである。

## 2.2 動詞

平家物語に用いられている動詞は、漢語にサ変動詞を加えた語、漢語の韻尾の部分を活用させた語に分類すると次のようになる。

### 1) 漢語にサ変動詞を加えた

#### (1) 一字漢語 (121語)

具す134 存ず59 奏す27 感ず21 帯す20 号す17 損す17 辞す14 案ず12 誅す12  
現ず11 参ず10 詠ず10 期す9 修す9 信ず8 制す8 請ず8 拜す8 報ず8 治す7  
宿す7 卒す7 陣ず6 詮ず6 達す6 同ず6 変ず6 略す6 処す5 牒す5 点ず5  
夏す5 補す5 列す5 臆す4 進ず4 惣ず4 長ず4 任ず4 銘ず4 叙す4 薨ず4  
愛す3 観ず3 決す3 察す3 執す3 謝す3 称す3 証ず3 忠す3 転ず3 亡ず3  
滅す3 欲す3 論ず3 学す2 帰す2 兼ず2 幸ず2 死す2 食す2 是す2 相す2  
弾ず2 通ず2 念ず2 判ず2 非す2 表す2 伏す2 満ず2 誦ず2 誘ず2 応ず1  
記す1 儀す1 擬す1 議す1 興ず1 凝す1 薫ず1 啓す1 詣す1 減ず1 拷す1  
散ず1 産す1 尺す1 住す1 准ず1 詔ず1 乗ず1 生ず1 撰ず1 贈す1 属す1  
談ず1 着す1 勅す1 動ず1 難ず1 発す1 犯す1 秘す1 標す1 服す1 覆す1  
免ず1 約す1 宥ず1 浴す1 利す1 療ず1 領ず1 礼す1 和す1 哭す1 墮す1  
挙す1

#### (2) 二字漢語 (300語)

御覽ず62 奏聞す34 出家す26 発向す23 僉議す22 守護す21 追討す18 供奉す15  
下知す15 同心す13 見参す12 自害す12 念仏す12 上洛す10 披露す10 存知す9  
後悔す8 対面す8 供養す7 成就す7 知行す7 追出す7 下向す6 祈誓す6 禁獄す6  
参内す6 実検す6 用意す6 流罪す6 院参す5 合戦す5 修理す5 入道す5 繁昌す5  
用心す5 乱入す5 祈念す4 見物す4 衰微す4 超過す4 追捕す4 通夜す4 登山す4  
披見す4 秘藏す4 評定す4 祇候す4 籠居す4 闕官す4 下洛す3 還着す3 居住す3  
教訓す3 元服す3 沙汰す3 最愛す3 三位す3 支度す3 修行す3 出仕す3 出入す3  
随喜す3 相伝す3 造進す3 退出す3 調伏す3 転読す3 納受す3 破滅す3 不覚す3  
蜂起す3 来迎す3 朗詠す3 圍繞す3 誅罰す3 讒言す3 騒動す3 安堵す2 引卒す2  
引撰す2 遠見す2 加階す2 加持す2 解散す2 廻向す2 改名す2 勧請す2 感嘆す2  
寄進す2 教化す2 興福す2 具足す2 群集す2 敬白す2 警固す2 孝養す2 高名す2  
獄定す2 再誕す2 濟度す2 裁断す2 在京す2 殺害す2 参会す2 四品す2 呪咀す2  
修造す2 重疊す2 述懐す2 書写す2 昇殿す2 照覧す2 色代す2 進退す2 尋所す2  
逗留す2 推参す2 宣下す2 前駆す2 相應す2 退散す2 値遇す2 知見す2 遅々す2  
着座す2 調練す2 停止す2 到来す2 入寺す2 陪膳す2 扶持す2 蔑如す2 芳心す2  
養育す2 落居す2 離山す2 陵礫す2 啼泣す2 讒奏す2 扈従す2 安置す1 異失す1  
一瓶す1 円満す1 延引す1 往生す1 往反す1 押領す1 化粧す1 介錯す1 会合す1  
解官す1 廻心す1 懷中す1 改易す1 勘当す1 寛宥す1 甘心す1 管弦す1 管領す1  
喜歓す1 帰依す1 帰敬す1 帰朝す1 帰附す1 帰伏す1 儀刑す1 救療す1 灸治す1  
給仕す1 巨動す1 許容す1 供御す1 恭敬す1 興行す1 極上す1 勤行す1 囑請す1  
啓白す1 結願す1 結番す1 兼学す1 兼帯す1 建立す1 乞食す1 口入す1 行道す1  
降伏す1 雑言す1 参勤す1 参詣す1 参候す1 参向す1 参入す1 参洛す1 参列す1

散在す1 思惟す1 死去す1 失墮す1 遮生す1 愁歎す1 愁涙す1 充滿す1 出御す1  
 出世す1 純熟す1 巡礼す1 所望す1 助音す1 助成す1 承悦す1 称誦す1 上座す1  
 上表す1 信仰す1 進上す1 震動す1 推察す1 崇重す1 成人す1 成等す1 成仏す1  
 正覚す1 生産す1 逝去す1 絶入す1 掃除す1 相続す1 装束す1 存命す1 損害す1  
 損亡す1 退転す1 遅留す1 逐電す1 注進す1 張行す1 牒奏す1 聴聞す1 調味す1  
 超越す1 長大す1 顛到す1 伝受す1 伝奏す1 東征す1 統領す1 逃散す1 動揺す1  
 同車す1 同宿す1 得脱す1 読経す1 乳和す1 入水す1 入定す1 入部す1 念珠す1  
 悩乱す1 破損す1 破壊す1 敗北す1 配流す1 発願す1 卑下す1 悲酸す1 浮沈す1  
 附属す1 服仕す1 服膺す1 腹立す1 仏道す1 物詣す1 閉門す1 放言す1 磨滅す1  
 満足す1 名誉す1 迷惑す1 鳴弦す1 鳴動す1 約束す1 与力す1 擁護す1 落馬す1  
 落涙す1 掠領す1 流転す1 虜領す1 領状す1 輪廻す1 連続す1 呵嘖す1 咫尺す1  
 嘲哂す1 帯剣す1 慚愧す1 糺問す1 翻翻す1

(3) 三字漢語 (4語)

正二位す2 従一位す1 従二位す1 副将軍す1

(4) 四字漢語 (0語)

## 2) 漢語の韻尾の部分を活用させた語 (1語)

装束く1

これを表にまとめると、<表3>のようになる。

<表3>動詞混種語の形態別の分布

動詞	平家物語	狂言集
一字サ変	121(28.4)	61(31.8)
二字サ変	300(70.4)	118(61.5)
三字サ変	4(0.9)	2(1.0)
四字サ変	0(0)	1(0.5)
接尾語を加えた語	0(0)	6(3.1)
音尾を活用させた語	1(0.2)	2(1.0)
和語動詞と融合した語	0(0)	2(1.0)
合計	426(99.9)	192(99.9)

<表3>から字数別の分布順に並べると、

平家物語のサ変動詞では、

二字サ変動詞(70.4%)→一字サ変動詞(28.4%)→三字サ変動詞(0.9%)→四字サ変動詞(0%)

で、狂言集では、

二字サ変動詞(61.5%)→一字サ変動詞(31.8%)→三字サ変動詞(1.0%)→四字サ変動詞(0.5%)

となり、平家物語・狂言集ともに字数別サ変動詞の順位は同一である。混種語の動詞の進出には資料差・時代差は認められないのである。二字サ変動詞と一字サ変動詞とを合計した比率は二作品ともに90%以上になり、サ変動詞のほとんどを二字・一字サ変動詞が占め、三字・四字サ変動詞は、わずかな割合を占めるにすぎない。特に、四字サ変動詞では、狂言集が一般語として「右行左行」の一語が用いられていたが、平家物語は皆無である。これは平家物語の語り系性、狂言集の口語性の反映となろう。なお、平家物語の動詞は、狂言集同様、サ変動詞がほとんどとなり、他は1語でほとんど勢力がなく、特に、狂言集の特有の待遇表現として用いられた「御座る」のような漢語に和語動詞を加えて融合させた語は1例も見られなかった。

## 2.3 形容動詞・形容詞・副詞

## 1) 形容動詞 (75 語)

### (1) ナリ活用 (57 語)

斯様なり52 散々なり38 様々なり21 不思議なり15 奇怪なり11 高声なり8 無暫なり7  
不便なり6 狼藉なり6 剛なり5 安穩なり4 過分なり4 尋常なり4 切なり4 無益なり3  
穩便なり2 大事なり2 美麗なり2 不肖なり2 不定なり2 分明なり2 悪逆無道なり1  
安樂なり1 一文字なり1 格別なり1 興無げなり1 空なり1 希有なり1 高貴なり1  
高名顔なり1 高名なり1 互角なり1 殊勝なり1 前後不覚なり1 率爾なり1 大切なり1  
丁寧なり1 徒然なり1 柔和なり1 莫大なり1 繁多なり1 非愛なり1 必定なり1 尾籠なり1  
不覚なり1 不吉なり1 不足なり1 不退なり1 無台なり1 不同なり1 不変なり1 平安なり1  
本意無げなり1 乏少なり1 無双なり1 悠美なり1 噉々なり1

### (2) タリ活用 (18 語)

漫々たり6 峨々たり6 茫々たり2 渺々たり2 穩淪たり1 皓々たり1 曠々たり1 晃様たり1  
嶮々たり1 蒼々たり1 颯々たり1 深々たり1 凄々たり1 沈々たり1 漠々たり1 平々たり1  
厖弱たり1 赫奕たり1

## 2) 副詞 (10 語)

一同に9 一度に7 一時に5 別して5 面々に5 一面に4 総じて4 須臾に1 年々に1  
念々に1

平家物語の形容動詞は、ナリ活用の語 (57語)、タリ活用の語 (18語) で、狂言集では、ナリ活用の語 (137語)、タリ活用の語 (7語) となり、二作品ともにタリ活用の衰退を見せている。形容動詞は「～ナ」の型で受容することが原則になっていることを示している。なお、狂言集と共通する語は、ナリ活用の語が16語 (「過分なり」「希有なり」「散々なり」「斯様なり」「殊勝なり」「尋常なり」「大事なり」「大切なり」「徒然なり」「不覚なり」「不思議なり」「不足なり」「不便なり」「分明なり」「無益なり」「狼藉なり」、タリ活用の語が二語 (「峨々たり」「渺々たり」) である。形容詞は、狂言集では5語用いられていたが、平家物語では、1語も用いていない。副詞は、狂言集では漢語サ変動詞型の語形と漢語形容動詞の連用形型の語形を取りながら固定化したものが5例 (「一層に」「総じて」「次第次第に」「別して」「直に」「楽々に」) あったが、平家物語では、それぞれ2例と8例用いられている。

## 3. 混種語の出自の考察

ここでは、前項の「混種語の使用度とその性格の<表1>で挙げた混種語を中心に品詞の出現を (1) 平安時代まで見える語、(2) 鎌倉時代に見える語に分け、出自別<sup>9)</sup>に考察する。なお、形容詞・副詞は用例がないか少ないため、考察から省略した。

### 3.1 名詞

前項の「混種語の使用度とその性格」で挙げた名詞を出現の時代別に分けると、次のようになる。

#### 3.1.1 漢字二字の語

##### 1) 重箱読みの語 (11 語)

###### (1) 平安時代まで見える語 (3語)

香染 染屋 座敷

###### (2) 鎌倉時代に見える語 (8語)

院方 願立 獄守 京上 紺搔 大力 分捕 乱箱

## 2) 湯桶読みの語 (28語)

### (1) 平安時代まで見える語 (7語)

足駄 今様 書様 斯様 然様 手本 花香

### (2) 鎌倉時代に見える語 (21語)

赤地 相図 尼前 荒行 大勢 大番 大幕 大様 小師 小勢 小兵 小門逆櫓  
指図 侍僧 侍品 猿楽 繁籐 手勢 七党 若党

平家物語の漢字二字の語では、鎌倉時代に見える語が29語で74.4%、次いで平安時代に見える語が10語で16.1%となり、狂言集が室町時代以降に見える語 (142語で 78.9%) が最多で、次いで鎌倉時代に見える語 (20語で11.1%) そして平安時代に見える語 (18語で10.0%) となる。この出現率を見ると、平家物語と狂言集とでは全体の80%前後の混種語名詞がそれぞれの作品の時代に現れている。ということは、字音語の名詞が平安時代から鎌倉時代そして室町時代に受け継がれている<sup>10)</sup>のに対し、混種語名詞は新しくその時代に和語と混淆し、多く用いられたことを示している。新語の登場の様相を呈している。なお、重箱読みと湯桶読みとを見ると、平家物語でも湯桶読みの語が平安時代から日本語化が進み、重箱読みの語より多くなっている。これは、前述したように、歴史的に漢字二字の語においては湯桶読みの語が重箱読みの語よりも日本語化が先んじていたことを示すものである。

## 3.1.2 漢字三字以上の語 (16語)

### (1) 平安時代まで見える語 (1語)

殿上人

### (2) 鎌倉時代に見える語 (15語)

大番衆 大番役 額打論 黄覆輪 小具足 小冠者 小教訓 小宰相 小侍従 白拍子  
白覆輪 長覆輪 若大衆 我御前 井花水

和漢混淆の進んだ型として考えられる三字以上の漢語では、(1)平安時代まで見える語が1語で6.3%、鎌倉時代に見える語が15語で98.8%となり、平家物語の三字以上の混種語の出自別においても、二字の混種語と同じことが言える。一方、狂言集でも(1)平安時代まで見える語が七語で3.0%、(2)鎌倉時代に見える語が10語で4.3%、(2)室町時代以降に見える語が215語で92.7%となり、室町時代以降に見える語が圧倒的な力を見せている。このことから和漢混淆の三字以上の語においても、平家物語では鎌倉時代、狂言集では室町時代の混種語が多く反映していることを示すものである。言い換えれば、漢語と和語とが複合した新しい語が二字漢語の場合と同様、各作品の時代に混種語名詞として数多く現れていることになる。

以上をまとめると、次の<表4>のようになる。

<表4> 混種語名詞の出自の分布

名詞		平安	鎌倉	合計
漢字二字 の語	重箱	3(27.3)	8(72.7)	11(100)
	湯桶	7(25.0)	21(75.0)	28(100)
漢字三字以上の語		1(6.3)	15(93.8)	16(100.1)
合計		11(20.0)	44(80.0)	55(100)

上の表によって、平家物語と狂言集の混種語の出自を検討すると

	平家物語	狂言集
平安	20.0%	6.0% (25語)

鎌倉	80.0%	9.5% (40 語)
室町		84.5% (354 語)

のようになる。平家物語と狂言集との名詞の出自の差を見ると、平家物語が狂言集より平安時代に見える語で約3倍、鎌倉時代に見える語で約5倍ほど多く現れているが、全体から考えると、平家物語で鎌倉時代の語が80%、狂言集で室町時代の語が全体の80%以上を占めているのが特徴である。これは、前述のように両作品成立の時代に新出の混種語名詞が多く登場したことになるが、歴史的な面から考えると、平安、鎌倉、室町時代と混種語名詞は漸次増加していったといえよう。なお、字音語のみでは、前時代の語をそのまま受け継いで、平家物語で平安時代の語が約70%、狂言集で平安時代の語が51.8%、鎌倉時代の語が38.6%で、合わせて約90以上の語が平家物語や狂言集の成立時より前の時代にすでに現れて使用されていた語であるのに対し、混種語では、その作品の時代になって新しく登場した語が多く使用されているのが大きな特徴である。

### 3.2 動詞

前項に挙げた動詞を形態別に、さらに時代別に、字数別に分類すると、次のようになる。

#### 3.2.1 漢語にサ変動詞を加えた

##### 1) 一字漢語 (121 語)

###### (1) 平安時代まで見える語 (47 語)

愛す	案ず	臆す	号す	幸ず	具す	和す	薫ず	興ず	現ず	参ず	散ず	死す
辞す	請ず	生ず	謝す	誦ず	准ず	信ず	進ず	制す	撰ず	奏す	損す	帯す
談ず	住す	治す	陳ず	点ず	動ず	難ず	任ず	念ず	拝す	秘す	伏す	覆す
服す	報ず	欲す	満ず	滅す	領ず	略す	論ず					

###### (2) 鎌倉時代に見える語 (74 語)

応ず	拷す	学す	感ず	帰す	記す	儀す	擬す	議す	凝す	挙す	観ず	啓す
詣す	決す	兼ず	減ず	薨ず	哭す	期す	相す	察す	産す	尺す	宿す	修す
執す	食す	処す	叙す	称す	証ず	詔ず	乗ず	是す	詮ず	惣ず	贈す	属す
卒す	存ず	墮す	達す	弾ず	誅す	忠す	長ず	着す	勅す	通ず	牒す	転ず
同ず	誘ず	亡ず	発す	判ず	非す	夏す	補す	表す	標す	変ず	犯す	銘ず
免ず	約す	有ず	浴す	利す	療ず	礼す	列す	詠ず				

##### 2) 二字漢語 (300 語)

###### (1) 平安時代まで見える語 (139 語)

安置す	安堵す	引卒す	引撰す	院参す	延引す	往生す	往反す	押領す
下向す	下知す	化粧す	加階す	加持す	会合す	廻向す	懐中す	改易す
勘当す	勧請す	寛宥す	甘心す	管領す	帰依す	帰朝す	儀刑す	灸治す
居住す	許容す	供御す	供奉す	供養す	具足す	警固す	結願す	見参す
見物す	元服す	御覧ず	乞食す	口入す	行道す	高名す	濟度す	三位す
参詣す	参入す	思惟す	支度す	自害す	実檢す	守護す	修行す	出家す
出御す	出世す	出入す	述懐す	巡礼す	所望す	書写す	上座す	上表す
信仰す	進退す	震動す	尋所す	逗留す	推察す	推参す	随喜す	成就す
成仏す	正覚す	逝去す	絶入す	奏聞す	掃除す	損害す	損亡す	対面す
退出す	逐電す	聴聞す	調伏す	調味す	超越す	追討す	追捕す	通夜す
転読す	顛到す	到来す	同車す	同心す	読経す	乳和す	入道す	入部す
念珠す	念仏す	悩乱す	破損す	破壊す	敗北す	配流す	発向す	卑下す

披露す	扶持す	浮沈す	附属す	服仕す	腹立す	仏道す	物詣す	蔑如す
芳心す	磨滅す	満足す	鳴弦す	約束す	与力す	用意す	用心す	落涙す
流転す	輪廻す	朗詠す	咫尺す	啼泣す	嘲哂す	圍繞す	帯剣す	慚愧す
翩翻す	讒言す	扈從す	騷動す					

(2) 鎌倉時代に見える語 (161語)

異失す	一瓶す	円満す	遠見す	下洛す	介錯す	解官す	解散す	廻心す
改名す	感嘆す	管弦す	還着す	喜歓す	寄進す	帰敬す	帰附す	帰伏す
祈誓す	囑請す	祈念す	救療す	給仕す	巨動す	恭敬す	教化す	教訓す
興行す	興福す	極上す	勤行す	禁獄す	群集す	啓白す	敬白す	結番す
兼学す	兼帯す	建立す	後悔す	孝養す	降伏す	合戦す	獄定す	沙汰す
再誕す	最愛す	裁断す	在京す	殺害す	雑言す	参会す	参勤す	参候す
参向す	参内す	参洛す	参列す	散在す	四品す	死去す	失墮す	遮生す
呪咀す	修造す	修理す	愁歎す	愁涙す	充滿す	重畳す	出仕す	純熟す
助音す	助成す	承悦す	昇殿す	照覧す	称誦す	上洛す	色代す	進上す
衰微す	崇重す	成人す	成等す	生産す	宣下す	前駆す	相応す	相続す
相伝す	装束す	造進す	存知す	存命す	退散す	退転す	値遇す	知見す
知行す	遅々す	遅留す	着座す	注進す	張行す	牒奏す	調練す	超過す
長大す	追出す	停止す	伝受す	伝奏す	登山す	東征す	統領す	逃散す
動揺す	同宿す	得脱す	入寺す	入水す	入定す	納受す	破滅す	陪膳す
発願す	繁昌す	悲酸す	披見す	秘蔵す	評定す	不覚す	服膺す	閉門す
放言す	蜂起す	名誉す	迷惑す	鳴動す	擁護す	養育す	来迎す	落居す
落馬す	乱入す	離山す	掠領す	流罪す	虜領す	陵礫す	領状す	連続す
僉議す	呵嘖す	祇候す	籠居す	糺問す	誅罰す	讒奏す	闕官す	

3) 三字漢語 (四語)

(1) 平安時代まで見える語 (0語)

(2) 鎌倉時代に見える語 (4語)

従一位す 従二位す 正二位す 副將軍す

4) 四字漢語 (0語)

3.2.2 漢語の韻尾の部分を活用させた語 (1語)

(1) 平安時代まで見える語 (1語)

装束く

(2) 鎌倉時代に見える語 (0語)

これを狂言集と比べて<表5>にまとめると、次のようになる。

<表5> 混種語動詞の出自の分布

動詞		平安	鎌倉	室町
一字漢語	平家	47(11.0)	74(17.4)	
	狂言	34(17.7)	19(9.9)	11(5.7)
二字漢語	平家	140(32.9)	161(37.8)	
	狂言	73(38.0)	26(13.5)	26(13.5)
三字漢語	平家	0(0)	4(0.9)	
	狂言	0(0)	0(0)	2(1.0)
四字漢語	平家	0(0)	0(0)	
	狂言	0(0)	0(0)	1(0.5)
合計	平家	187(43.9)	239(56.1)	
	狂言	107(55.7)	45(23.4)	40(20.8)

平家物語の一字・二字・三字以上の漢語は、平安時代まで見える語が四三・九%、鎌倉時代に見える語が五六・一%となり、鎌倉時代に見える語が平安時代に見える語を凌駕する数値を見せているのに対し、狂言集では一字漢語・二字漢語いずれも平安時代までにみえる語が最多で、次いで鎌倉時代の語、そして室町時代以降の語と減少している。三字漢語以上の語は、平安時代までと鎌倉時代とに現れていないのが特徴である。

これを出自の全体的な比率からみると、両作品ともに約五〇%前後の語が平安時代の語を受け継いでいることになるが、鎌倉・室町時代の出自の差は大きい。これは、平家物語が戦乱を場面にする物語であるため、対象の行動・動作などの叙述に用いられる動詞が狂言集に比べて鎌倉時代に和漢混淆の新たな語として現れ、新しい混種語として多く用いられたものと考えられる。なお、狂言集の混種語の動詞は、全体の約八〇%が平安・鎌倉時代までにすでに存在し、室町時代では前代に比べ比率的には低い。特に平安時代までの語が比率が高いのは、室町時代に新語が頭打ちになり、多く前代に依存するようになったことを意味しよう。また、そのような傾向を見せながらも、三字漢語・四字漢語が和漢混淆の新たな語として現れ、新しい混種語を着実に形成していたことが伺われる。

### 3.3 形容動詞

#### 3.3.1 ナリ活用 (57語)

##### (1) 平安時代にまで見える語 (32語)

安穩なり 一文字なり 過分なり 奇怪なり 希有なり 剛なり 散々なり 斯様なり  
 殊勝なり 柔和なり 尋常なり 大切なり 丁寧なり 徒然なり 莫大なり 尾籠なり  
 美麗なり 必定なり 不覚なり 不思議なり 不肖なり 不足なり 不定なり 不便なり  
 平安なり 本意無げなり 無益なり 無暫なり 無双なり 様々なり 率爾なり 狼藉なり

##### (2) 鎌倉時代に見える語 (25語)

悪逆無道なり 安楽なり 穩便なり 格別なり 興無げなり 空なり 五角なり 高貴なり  
 高声なり 高名なり 高名顔なり 切なり 前後不覚なり 大事なり 繁多なり 非愛なり  
 不吉なり 不退なり 不同なり 不変なり 分明なり 乏少なり 無台なり 悠美なり  
 噉々なり

#### 3.3.2 タリ活用 (18語)

##### (1) 平安時代にまで見える語 (5語)

尪弱たり 蒼々たり 漫々たり 渺々たり 茫々たり

##### (2) 鎌倉時代に見える語 (13語)

穩淪たり 峨々たり 赫突たり 晃様たり 深々たり 凄々たり 沈々たり 漠々たり  
 平々たり 嶮々たり 曠々たり 皓々たり 颯々たり

これを狂言集と比較して次の<表6>に挙げる。

<表6> 混種語形容動詞の出自の分布

形容動詞		平安	鎌倉	室町
ナリ活用	平家	32(42.7)	25(33.3)	
	狂言	47(33.3)	43(30.5)	44(31.2)
タリ活用	平家	5(6.7)	13(17.3)	
	狂言	3(2.1)	1(0.7)	3(2.1)
合計	平家	37(49.3)	38(50.7)	
	狂言	50(35.5)	44(31.2)	47(33.3)

平家物語の形容動詞では、平安時代まででナリ活用が42.7%、鎌倉時代で33.3%、タリ活用は、平安時代までで6.7%、鎌倉時代で17.3%となる。また、平家物語・狂言集ともにタリ活用が形容動詞形成では活発ではないのが特徴である。これは、時代の趨勢としてタリ活用よりナリ活用の方を主に用いるようになったためである。形容動詞全体の比率からは、平安時代までが49.3%、鎌倉時代が50.7%となり、狂言集が平安時代の次に室町時代が優勢な姿をみせているのに対し、平家物語では鎌倉時代そして平安時代に比率が低くなっている。また、形容動詞の形態上、狂言集が漢語に「ナリ」「タリ」が後接した形が大多数を占めているが、混種語に「ナリ」「タリ」が後接する形も八語がみられたが、平家物語ではナリ活用で「和語+漢語+なり」の語構成が「斯様なり」「本意無げなり」の2語、「漢語+和語+なり」の語構成が「興無げなり」「高名顔なり」の2語が用いられている。

#### 4. おわりに

以上、平家物語に現れる名詞・動詞・形容動詞を出現時代ごとに考察したが、改めて、以下に狂言集と比較して異なり語数の全体に対する比率を時代ごとに示すと、次の<表7>のようになる。

<表7> 混種語の出自の分布

品詞		平安	鎌倉	室町
名詞	平家	20.0	80.0	
	狂言	6.3	9.3	84.3
動詞	平家	43.9	56.1	
	狂言	55.7	23.4	20.8
形動	平家	49.3	50.7	
	狂言	35.5	31.2	33.3

この表の混種語を品詞別の比率の順に配列すると、平安時代までに用いられている品詞は、

平家物語 形容動詞→動詞→名詞

狂言集 動詞→形容動詞→名詞

の順に比率が下がり、鎌倉時代では、

平家物語 名詞→動詞→形容動詞

狂言集 形容動詞→動詞→名詞

の順になり、室町時代では、

狂言集 名詞→形容動詞→動詞

となり、品詞別の順位は時代順に異なっている。これは、前述のように日本語と熟合した漢語混種語の、時代による品詞の出現率を如実に示し、高使用度の品詞は、作り易い品詞から始まっているのである。即ち、平家物語では混種語を作りはじめた平安時代まででは、漢語に「す」または「なり」「たり」を下接させて作る動詞・形容動詞が勢力を伸ばしている。しかも、これらの基本的な語の多くはこの時代に登場し、鎌倉時代に漸次増加していったのに対し、名詞混種語は、鎌倉時代に大々的に新出した結果、それ

を反映した平家物語において80.0%の使用率を示し、平安時代の語（20.0%）の4倍の使用にいたったものである。

一方、狂言集では、動詞、形容動詞については平安時代以降漸減しているのに対し、名詞混種語が室町時代に圧倒的勢力を示しているのは、狂言集が室町時代語を色濃く反映した結果である。名詞混種語は、平家物語が鎌倉時代に依拠し、狂言集が室町時代に依拠しているのである。

すなわち、すでに述べたように、字音語のみでは、前時代の語をそのまま受け継いでいるのに対し、新出の混種語名詞は作品が成立したそれぞれの時代に多く登場したことになるが、歴史的な面から考えると、平安、鎌倉、室町時代と混種語名詞は漸次増加していったといえよう。このように、漢語は受容の初期段階までは限られた知識人階層によって、書記言語（書き言葉）としての役割を担っていたが、中世は貴族中心の言語に代って民衆的な言語が台頭し、初期の外来語次元からの受容が日本語に同化され、漸次日本語化していったといえる。なお、日本語の歴史上、中世を一纏めに考える傾向があるが、前期の鎌倉時代と後期の室町時代では漢語受容史上、分けて考えるべき時代である。

最後に、今後の課題として鎌倉時代の他の資料と、また近世資料との比較によってこの点を十分に検証していかなければならないと考えている。

#### 【注】

- 1) 日本語の時代区分の詳細については、佐藤武義(1995),『概説日本語の歴史』,朝倉書店 参照されたい。
- 2) 佐藤喜代治(1980),『講座国語史 第3巻 語彙史 第4章 近代の語彙 I』,大修館書店
- 3) 全亨式(1999),「混種語の品詞についての史的考察」『日本語学研究』第一輯,韓国日本語学会
- 4) 日本古典文学大系(1959),『平家物語上・下』,岩波書店
- 5) 混種語は、異なる語種の結合による語をさすが、本論文では洋語との結合例は見えないため、「漢+和」「和+漢」のように二種の語による結合に限定する。
- 6) 宮島達夫(1975),『古典対照語い表』,笠間書院、国立国語研究所(1962),『現代雑誌九十種の用語用字』,秀英出版
- 7) 重箱・湯桶読みは佐藤喜代治編『国語学大事典』,明治書院の定義に従い、二字で書き表された語のみを対象にした。
- 8) 全亨式(1999a),「混種語の品詞についての史的考察」『日本語学研究』第一輯,韓国日本語学会  
\_\_\_\_\_(1999b),「漢語受容史についての一考察」『国際文化研究』第6号,東北国際文化学会
- 9) 本論は、一語一語の歴史的考証をする方法とは性質を異にするため、用例の出現時期決定の根拠としては主に仮名文学作品に用いられている用例によった。なお、時代区分は『国語学研究大事典』の「国語史年表」に従った。
- 10) 全亨式(2000),「天草版平家物語の字音語에 대한 사적 고찰」『日本語文学』第9輯,韓国日本語学会

#### 【参考文献】

- 佐藤喜代治(1981),『講座日本語の語彙第四巻「中世の語彙」』,明治書院  
\_\_\_\_\_(1982),『講座日本語の語彙第二巻「日本語の語彙の特色」』,明治書院  
鈴木修次(1978),『漢語日本人』,みすず書房  
新野直哉(1987),『漢字講座=3 漢字と日本語「重箱・湯桶読み」』,明治書院  
松村 明(1986),『日本語の世界2 日本語の展開』,中央公論社  
山田俊雄(1954),「いわゆる湯桶読・重箱読について」『成城文芸1』,成城大学文芸学部

## The Historical Consideration about the Part of Speech in Hybrid in HEIKEMONOGATARI

Jeon, Hyung-Sik

#### ABSTRACT

This paper examined the distribution of part of speech in hybrid written in HEIKEMONOGATARI, the representative KUNKIMONOGATARI in Gamakura era, compared

against KYOGENSHU, which was the oral language material in Muromachi era.

First, we used the statistical measuring method to find out the general features and rates of the hybrid. We then examined the data to determine how the Chinese characters were accepted and assimilated by classifying the data according to the time periods of its appearance in the parts of speech.

As the result, we noticed that Muromachi era had the high rate of hybrid and noun hybrid in their parts of speech.

Although many new noun hybrid appeared in the literature of each era, they increased in frequency during the Heian, Gamakura, and Muromachi eras.

住所 : 139-200 서울시 노원구 상계동 1285 동아불암아파트 104-403

電話 : 02-3290-2147

E-mail : jeonhsk@korea.ac.kr

K C I